国際教育実践編

地域における国際理解教育
～人のつながりをひろげて～

下関市教育委員会教育部菊川教育支所
派遣社会教育主事　桑原　武夫

１　はじめに

私は現在、社会教育主事という職にあり、学校における地域連携教育を含め、広く地域における社会教育・生涯学習に関わっている。そのなかで、国際理解につながる様々な取組に触れたり、自らの業務として行ったりする機会が年々増えてきていると感じる。この研究紀要は学校関係の方々、特に日本人学校等勤務経験者の方々が読まれることが多いとのことなので、本稿では、それらの取組事例とそこから私が学んだことを、特に学校教育の場で生かせるのではと考えるものに焦点を当てて、学校という場に近い取組から順にご紹介する。

２　取組事例と、学んだこと

(1) 海外からの転入児童の保護者による国際理解教育活動

下関市内のある学校の２・３年生学級で、約４年半のフィリピン滞在から帰国して転入してきたＳ児の保護者による、国際理解教育活動が行われた。保護者と学級担任の先生には、現地幼稚園と日本人学校で計４年半を過ごしたＳ児が、新しい友達と早くなじめるようにとの思いもあったと伺っている。フィリピンの人々、文化、そこでの生活等の紹介も、Ｓ児や家族の写真とエピソードをもとに語られ、低学年の児童も強い関心をもって聞いていた。そのなかには、「ねえ、いっしょに遊ばないの？」という問いかけに対して「うん」とＳ児が言うとき、それは「遊ぶ」という意味である、という言語文化的な相違など、日常的な学級生活に直結する示唆も多く含まれていた。学習の最後には、学級の児童がＳ児と保護者に握手をして、「あらためて、よろしくね！」と挨拶をし合う場面もあった。

ここで私が学んだことは、まず、海外生活の経験がある方々は意外に身近に多くいらっしゃるということである。Ｓ児の保護者は、勤め先の企業のフィリピン法人に異動となり、そこで長期間家族で過ごされた。その方のお話によると、派遣先は様々だが、同じような家庭は校区内に多いとのことである。また、海外生活の経験がある方々は、国際交流・異文化理解の大切さを実感していたり、ご自身の経験を生かせる場を求めていたりすることが多いとのことである。また、勤め先や日本人学校でのつながりなど、海外生

活経験がある人同士のつながりをお持ちである。

ここからさらに私が学んだことは、地域連携教育全体にとって、このような取組がもたらす良い影響についてである。地域連携教育についてよく言われる課題として、「地域における担い手の不足」や「人材の固定化・高齢化」がある。これまであまり関わりの無かった方々にもそうした取組に参加・参画していただけるきっかけとして、国際理解教育というアプローチは非常に可能性が大きい。実際に、Ｓ児の保護者には、後述の菊川教育支所主催の国際理解教育関連事業のスタッフとして参画していただいたり、私個人が行う国際交流支援等にお力を貸していただいたりすることとなり、そこからさらに新しい人のつながりが生まれている。

学校において、読み聞かせや家庭科のミシン指導等で、保護者・地域の方々に支援していただく取組が浸透しつつある。そのような活動をされている方々が、各学校の地域連携教育を担うキーパーソンであることも多い。一方で、国際理解教育においては、保護者・地域の方々の支援で、という取組はまだ一般的ではないようである。国際理解教育を学校・教職員だけで完結させないというスタンスは、学校における国際理解教育の推進にとっても、地域連携教育の推進にとっても、プラスに働くと考える。

(2) 小学校における中国からの視察団の受け入れ

下関市内の別の小学校では、市の要請により、中国からの視察団（子どもと引率教員等計30人程度）を受け入れることとなった。その学校では、ランチルーム等学校施設を紹介した後、児童による「よさこいソーラン」の披露、児童との仲間づくり活動（言葉が通じなくてもみんなで楽しめる遊び）で、交流を深めた。視察団の子どもたちからは、伝統唱歌の披露とプレゼントの贈呈があった。

ここまでは一般的な交流活動であるが、この小学校ではこの後に、中国の子どもたちに地域ボランティアの方々が折り紙を教える、というワークショップを設定していた。普段読み聞かせで定期的に学校を訪れているグループに、事前に趣旨を説明して、「中国の子どもたちにぜひ折り紙を教えてあげてください」と依頼をしていたとのことである。折り紙ワークショップは盛況で、地域ボランティアの方々にとっても、中国の子どもたちにとっても、楽しく充実した交流となっていた。

ここで私が学んだことは、国際理解に係る学習機会を保護者・地域の方々にもひろげることの重要性である。地域の方々にとっては、日頃直に接することのない中国の子どもたちと接する機会を得たことになる。皆さんの感想からは、「子どもたち、よく学んでいたよ」「日本の子どもたちと変わらんね」「笑顔がかわいかった」「とても良い機会でありがたかった」「またこんな機会があったら良いね」といった声が聞かれた。この機会を

学校・教職員だけで完結させなかったことには、地域全体の国際理解の推進にとって大きな意義があったと考える。

子どもは学校だけでなく、家庭を含む地域全体で育つことは言うまでもない。本当に国際理解を推進しようと思うなら、子どもを取り巻く大人たち、つまり家庭を含めた地域全体の国際理解を推進していく必要がある。もちろん、それは学校が全責任を負うことではない。しかし、今回の事例は、地域全体の国際理解の推進に、学校が果たし得る役割についてのヒントを示していると思う。なお、約２時間の視察団受入れ時間の半分を地域の方々が担当してくださったことが、授業時数の確保や教職員の負担軽減につながったことも付記しておく。

(3) 社会教育事業としての「英語でクリスマス会」

昨年度から、菊川教育支所主催で、担当地域内の小学校高学年の希望者を対象とした「英語でクリスマス会」を実施している。スタッフとなるALTも市内全域から募集し、地域ボランティアにも来ていただいた。参加者も、スタッフも、自由意思による参加という、社会教育のアプローチをとっている。ちなみに、今年度は５校から15人の子どもたち、４地域から４人のALT、そして２人の地域ボランティアが参加した。

内容は、英語を用いた自己紹介や仲間づくり活動、各ALTの出身国でクリスマスに楽しまれている遊びを楽しむ活動、ジンジャーブレッド作り、ハロハロ作り等である。企画はスタッフ間の話し合いで進めた。

ここで私が学んだことは、まず、ALTはもっと活躍できる、ということである。この「英語でクリスマス会」では、主体的に、授業ほどの制約がない場で自由に、国際交流・異文化理解活動を考えることができるということもあって、ALT仲間同士で楽しみながら、積極的に企画する姿が見られ、非常に頼もしかった。当日の、子どもたちとの活動においては、「クリスマス会を一緒に楽しむ仲間」として、そのコミュニケーション力を遺憾なく発揮していたことは言うまでもない。

また、子どもにも保護者にも、こうした英語を活用する活動やALTを含む外国の人々とコミュニケーションを図るような活動に対するニーズが強いことも分かった。他の社会教育講座には顔を出したことがない子どもも多く参加するようになった。また、前述のＳ児の保護者は、進んでお力を貸してくださり、ハロハロというフィリピンのスイーツ作りを企画し、運営してくださった。

さらに、子どもたちが、学級・学校から一歩外に出て、新たな人間関係を築いていくことの重要性も感じた。参加した子どもたちは、ほんの数時間の活動であったが、初めて会った他校の子どもやALT等にも、英語で、あるいは日本語で、自然に話しかけることができるようになっていった。身近な他者との交流は、国際交流の第一歩である。

「いつもの仲間、いつものALT・担任と、いつもの教室で、外国語活動・外国語科」も大切であるが、「普段会うことのない仲間、普段会うことのないALT・地域の方々と、いつもとはちがう場所で、学んだ英語を活用しながら様々な活動を楽しむ」ことは、いっそう子どもたちのコミュニケーション力を高めるのではないかと思う。前者は学校教育の、後者は社会教育の管轄であり、両者が相互に補完し合うことが、これからの世の中を生き抜くコミュニケーション力と、豊かな国際感覚をもちあわせた子どもたちを育てることにつながると思う。

(4) 海外の財団との連携による国際理解教育活動

ここ最近特に強く感じていることだが、意外に身近なところに、海外から来られている人たちがいるものである。例えば、Grizedale Artsという、芸術を通して世界中の様々な地域課題を解決する、という財団が、数年前から下関市の菊川町を日本における拠点に位置付けて、世界の過疎の村をつなぐプロジェクトを展開している。彼らとは、菊川教育支所として、あるいは私個人として、様々な形で連携・協力をしているところである。ここでは、菊川教育支所主催で、彼らを講師として開催した「英語で！世界のおやつ作り教室」についてご紹介する。

これは、スペインの伝統的なおやつ“turron”を始めとする何種類かのおやつ作りを、アイルランドやイギリス等から来た人たちが、英語だけで子どもたちに伝え、一緒に調理し、楽しむという企画であった。会場は古民家で、食材は地元の果物や野菜（あけび、落花生等）、はちみつ等を用いていたので、日本的な要素も強くあり、かえっていっそう国際色豊かで、興味深い活動であった。

ここで私が学んだことは、学校と直接関係のないところに、国際理解教育のタネは多く存在しているということである。Grizedale Artsの人たちとは、数年前に偶然菊川町の山間の古民家で出会い、それ以来のお付き合いである。私も社会教育主事と言う仕事柄、今でこそ社会教育・生涯学習の視点で物事を見ることもできるようになってきているが、一昨年度まで小学校教員として働いていたので、かつては学校を学びの中心と考えがちであった。しかし、少なくとも国際理解教育に関して言えば、学びの場は学校外にこそ多いし、学校外でこそ盛んに行われると良い、と今では考えている。それは数年後、学校に戻ってからも変わらないと思う。

では、そういった「地域における国際理解教育」について、学校・教職員は全く関係ないのだろうか。ある意味で、関係ないと言えるかもしれないし、何でもかんでも学校に任せがちなこのご時世、関係ないときっぱり言いたい気もする。一方で、個人としての「私」に関係ないのかと問われれば、関係ないとは言えない。なぜなら、私は、自分が住む地域の一員だからである。地域における国際理解教育を推進

する主体は、その地域に住む住民であるから、地域における国際理解教育は、私に関係のあることである。海外勤務経験はなくても、主にビートルズで培ったわずかばかりの英語の能力と、国際交流・異文化理解に対する興味・関心をもつ私に、できることは意外にたくさんあるのかもしれないと思って、仕事ではないところでも、草の根の交流やその支援等を細々と行っている。そこで生まれたつながりは、めぐりめぐって私の現在の仕事にプラスに働いてもいるが、それは些細なことである。私は、こうして得られたつながりは、現在の仕事と関係のないところでこそ続いてほしいと願っている。

３　まとめ

国際理解教育の推進において、保護者や地域の方々とのつながりのタネをまき、育てることは、国際理解教育そのものの充実に資することは言うまでもなく、地域連携教育全体にとっても非常に意味のあることだと思う。「ここで、地域の人に入っていただいたらどうだろうか」とか「〇〇さんのおうちの方は、確か海外勤務経験があったから、お願いしてみよう！」とかというような、ちょっとした工夫・発想・コミュニケーションの積み重ねで、つながりがひろがる。そのつながりは、学校の財産になるのではないだろうか。前述の中国の視察団受け入れの事例において、学校が地域ボランティアの方々に声をかけて充実した交流が実現したのは、日頃から学校・家庭・地域のつながりがしっかりとできていたからである。

一方で、家庭・地域における国際理解教育もまた、学校がそのようなつながりのきっかけを作ることによって、充実していく部分があると考える。子どもたちが国際感覚豊かに育つためには、周りの大人たちの国際感覚が豊かであることが重要である。これは、読書好きな子どもが育つためには、周りの大人たちが読書好きであることが重要である、ということと似ている。

外国語教育改革の流れのなかで、「活用」や「オーセンティック」という言葉が頻繁に聞かれるようになって久しいが、学んだ言語の活用の機会やオーセンティックな国際交流・異文化理解の機会を提供することについて、社会教育が果たせる役割は大きいと考える。また、子どもたちが、学級や学校、あるいはスポーツクラブや学習塾等の「いつもの仲間」の枠から、自らの意志で一歩外に出て、身近な他者との人間関係を築いていくこと自体が、国際交流・異文化理解の第一歩と考える。国際理解教育の推進にあたって、学校教育と社会教育の連携は欠かせないと思う。

地域における国際理解教育は、社会教育・生涯学習の範疇であって、学校・教職員には直接関係ないが、地域住民としての「私」には関係がある。とりわけ、数年間にわたる海外生活経験があり、多様なつながりをお持ちで、教育への理解も兼ね備えた、日本人学校等勤務経験者の方々は、地域における国際理解教育推進の中心的存在となり得る貴重な人材と考える。なお、日本人学校等勤務経験がないにも関わらずこの紀要を読まれている方々は、ある意味で、よりいっそう貴重な人材ではないだろうか。本稿

では、紀要の読み手を意識して、子どもに関係する取組ばかりを紹介したが、大人を主な対象にした取組も多くあることは言うまでもない。国際理解教育に対する潜在的・顕在的ニーズは対象年齢を問わずあるが、予算が追いつかず、学びの場のいっそうの充実が課題となっている。社会教育・生涯学習の場に、ぜひ皆様のお力を！（ボランティアで、ですけど！）————実はこれが本稿で最もお伝えしたいことである。